
隣のトナリの尾山君

風車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣のトナリの尾山君

【Nコード】

N0212B

【作者名】

風車

【あらすじ】

尾山君は、ちょっとした変人。私は、そんな尾山君と腐れ縁。そんな私達に、ある日、転機が訪れた。

前編（前書き）

恋愛というより、「ギャグ恋愛」ですから。
ご了承ください。

前編

「ハ―イ、ハハ―イ♪ハ―イ、ハハ―イ♪エヴィバディぷっちゃん♪」

廊下のだ真ん中で手を上に上げて、下に下げて、そして叩く。
体をゆらゆら揺らす。

顔にはヘラツとした笑顔が張り付いて。

そんな男は私の隣の席の尾山君。

そんな私は冷静沈着の美少女学級委員。

・・・のはず。

「ぷっちゃん♪プッチン!!」

そうこうしているうちに、尾山君は体を×型にして決めポーズを決めていた。

そして、その横を私は他人の振りで素通りする。

スルスルスル・・・

・・・がしっ

私の肩が錘が乗ったように重くなった。

「やあ、葉山さんvv」

「・・・こんにちは」

周りの皆の視線が痛い。コイツと同類と思われてんのか・・・？
やだ。ハッキリ言っ嫌。

「葉山さん、早く教室戻ろvv」

「・・・え・・・ええ」

言葉にして嫌・・・とも言えない。

そして、この男の踊りは再開した。

もう、説明さえ今さらであるが、見ての通り尾山君と私は腐れ縁である。

何故・・・なんて聞かないでほしい。

小学校・・・否、生まれる前から（家が隣同士なのだ。）幼稚園までもクラスも班も席も同じなんて、腐れ縁より他は無い。

運命・・・なんて、思いたくも無い。

理由は一つ。

「エヴィバディ フォ———」

今現在、ハー●ゲイが精神を乗っ取っているこの男の素行についてそれしかない。

小さい頃は楽しかった。『踊って歌えるアイドル』と言われたコイツ。

だが、大きくなってまだそれ続けていたらそれは只のあほだ。

アホでなければ、馬鹿。イカレおたんこなす。

「イカレおたんこなすって死語だよ」フ———」
ドキッ

「あ、図星った？」

「な、何で・・・！！！」

「何年の仲だと思ってるの！？葉山さんの思考回路の行く先なんてオッレにはお見通し」vv」

こ、こいつ・・・私のプライバシーを・・・

「何だと思ってるの！！！」

「それは私の台詞よ！！！」

ぱしんつと手元にあった書類の山で尾山を殴る。

「ぐぎゃっ」

蛙を踏み潰したときのような声が尾山の口から漏れた。ザマアミロ。

「そ、それ・・・ちよー重くない？葉山さんの体重と腕力と重力が加わって・・・俺ってば、K・O・必至。」

「葉山さんの体重重い。」

「じゃあ、お望みどおりK・O・させてやりましょうか……？」
私は書類をもう一度振り上げた。と……

「わやややや……」

よろけた。おもくそよろけた。

「ぷっ。」

尾山がへらへら顔をさらににやけさせた。

む……ム力つく……！！！！

お山の富士山めえええええええ！！！！

私は書類を片手にこぶしを握り締めた。

それを見た尾山は少しあせりながらも謝罪した。土下座で。

「今回の件は私が悪うございました。どうかかしこみかしこみ……

……」

何故、古風？

今度は私が「ぷっ」と笑った。

「よし、そなたの反省っぷりを信じて無罪放免にしてやろう。」

少しばかりの悪乗りだ。

「ああ、ありがたや……ありがたや……」

尾山も当然ながらノってくる。そして、二人で笑う。そして……

「……！！」

はつとした。これではコイツとモロ同類じゃん。

ああああああああ……

そうこうしているうちに、尾山はおもむろに書類に手をかけた。尾

山はヒョロ男。持ち上げでもしたら絶対こける。

「重そうだね。持ってあげるよ。」

「ちょ……あぶ……」

ひょいっ

……あれ？

持ち上げた。軽々と。

「やつぱり、重いなあ……。よくこんなの持ってたね、葉山さ

ん。」

否、全然重そうに見えないんですけど。

「これじゃあ、ムキムキマッチョになっちゃうはずだ。」

プツ。

数秒後、学校の廊下中にダンプカーが正面衝突したような音がこだました。

数時間後。

家にて。

「それで、綾は尾山君のこと、好きなの？」

ぶっ

私は、実の母親の顔面に向かって（不本意にも）味噌汁をぶっつけた。

「な、ななななに言ってるのよ!!」

「その動揺っぷり、淡い恋の臭いがぷーんとするわぁ・・・v」

何、ロマンチックに浸ってるのよ。

まあ、あの重い書類を一人で軽々担ぎ上げたのはすごい・・・と思っただけ・・・。

「あのデリカシーの無いボケボケ男に恋なんて・・・
するはずないでしょ。」

「どうでしょ？気持ちによるんじゃないくて？」

オーッホッホッホッホッホッ・・・

なんだよ、その高飛車な笑い方は。
苛々する。

全てに苛々する。

『ムキムキマッチョになっちゃうはずだ。』

ムカツク!!!!!!

バキッ

「きゃーっ、お父さん！綾ちゃんが家庭内暴力真っ最中だわー！机

を・・・！？」

「手が・・・」

机を攻撃した拳が・・・動かしにくい。
最悪だ。

夢なら、覚めてしまえ。

前編（後書き）

ギャグ恋愛ものです。

話が荒い・・・荒いよぉ・・・（泣）

そんな僕の小説でも楽しんでいただけたら幸いです。

中編

「・・・ということで、責任、とってね。」
「は。」

家にて、家庭内暴力を起こした代償は大きかった。

第一に、机が割れた。私は弁償代として、お小遣いを全て没収された。

第二に、夕食が木片と皿の欠片で食えない状態になった。

第三に・・・

「私の手の骨折は本を糺せばあんたのせいなんだから。」

そう、机を破壊した衝撃で私の利き腕の手の甲の骨がいった。これが今回最悪の代償だ。

「責任とって、私の雑用をしなさい。」

「え〜〜〜〜・冗談きついで ベ・イ・ベ・・・「わかった?」・・・はい。」

私の怒りの剣幕にすごすごと引いていく。

それでいいのよ。フンッ。

「精々、しごいてこき使ってやるから、覚悟しな!!」

尾山の顔が、後悔とちよつとした怒りで引きつっていた。

ほら、見なさいよ。

お山の富士山なんて全然好きじゃないんだから!!!

「で。なんで書類持ち?」

「黙って運んで。ざ・つ・よ・う・さんv」

「くっ・・・」

二時間目休み。いつもは踊りを踊っている時間帯なのだが、今日は両手が封印されて動かせるわけが無く、踊っていない。

「葉山の鬼!ムキムキマツちょ!!--!!」

「あら、もつと重くして差し上げましょうか？」

クククツと私が笑みを漏らすと、余所見をしていたせいか、とんと誰かにぶつかった。

「きゃっ」

よろける私を尾山が絶妙なバランスで支える。手がふさがってんの……猿並みの器用さだ。

「助けたのに……それは無いんじゃない？」

涙目で訴えてくるが、人のプライベートに頭つつ込んでくるやつは黙視。と、その時。

「何をしているんですか？」

目の前で声がした。そういえば、ぶつかった人の存在を忘れていた。「まったく、最近の子供……得に君は、礼儀がなっていないですね。」

「……生徒会長……か。」

相も変わらず、嫌味な奴。自分だって、気付かなかったってことは余所見でも何でもしてたんذار。

「自分だってガキでしょ。」

「なんだと……？」

生徒会長様様の眉間にしわがよった。

「うわっ、沸点低すぎ。それでも生徒会長？」

私は挑発を続けた。こいつだけはどうしても尾山以上に気に食わない。

前もそうだった。人が意見しただけで、すぐ沸騰して切れる。そして手をあげる。

私の友達もその被害にあって、大怪我をした。絶対気に食わない！「どっちかと言えば、お前のほうが最近の子供だよ。」

「てめっつ……！！」

生徒会長が手をあげた。ヤバイ。やりすぎた。

ひゅっという、空を素早く切る音。私は、思わず目ぎゅっをつぶる。

「・・・痛みはやってこない。」

「はいはい。生徒会長さんがそんなにキレイない、キレイないvvせつかくの美形が台無しよv」

「・・・尾山？」

私の目の前には尾山が立っていた。私に攻撃しようとした生徒会長の手を掴んだまま。

「まあ、ここは超美形&頭脳明晰な俺に免じて許してvv」

「は、離せ・・・!!」

「ね。」

このときの尾山・・・何といったらよいのだろう。

笑顔なのに・・・身にまとうオーラが恐ろしい。

「・・・ちっ」

そのオーラに圧されて生徒会長は逃げていった。うっわ、情けない・・・でも、今の尾山はちよつとだけカッコよかったかな？少しだけ見直した。

「ささ、行こっか。葉山さんがムキムキマッチョにならないように俺様が引き続き荷物持っててやるから。」

ぶちっ・・・・・・バキッ

前言撤回。

「・・・こ、こき使いすぎ・・・」

お昼休み。ランチタイムという清々しい時間に尾山は見事にくたばっていた。

自慢の踊りも出来はしない。

いつも私に恥をかかせてる罰ね。ホホホホvv

「荷物もちとかならまだわかるけど、なんでノート整理とかメシ代まで・・・」

「私は聞き手を怪我したの。文字もかけないし、財布から小銭を出すなんて面倒よ。」

「そーですかい。」

尾山は呆れたように半目でおにぎりを頬張る。まるで、木の実を口に入れたリス状態だ。

周りが静かになる。

風の音が気持ち良く辺りに響く。

さわさわわ・・・

「！ふあーいえわは、ふあふひはんっへふいふいふあふえんふえんほ？」

何語だ。宇宙人が使う言語か？

尾山は未知の言語で静寂を破ると、お茶を流し込み、ごぎゅんと一気に飲み込んだ。

「そーいえば、葉山さんってイジメられてるの？」

どきっ・・・とした。そんなこと、親にも話したこと無かったのに。「イヤイヤ、葉山さんの周りってやけに騒々しいから。上履き無くなったり、なんか悪口言われてたり、色々と。今日一緒にいてわかったよ。」

尾山が寂しげな顔をする。

どきっ

「そ、それがどうしたのよ！！」

あくまで強気姿勢な私。弱気なところなんて見せるか！！

・・・実は、本気でこの頃参ってきてるなんて・・・

「・・・悟らせてたまるか・・・でしょv図星った？」

「！！・・・お山の富士山めえええ！！まっった人のプライバシーを・・・！！！！」

「へへへ」僕ちゃん、「葉山さんのことなら何でも分かっってしまう病」なのだ」

聞いたことねえよ、んな病気。

「『聞いたことねえよ、んな病気。』」

「・・・次は、全学年の資料集を『一人で』運んでもらおうかな」お許しください。」。

ふっ・・・勝った。

私は勝ち誇ったような顔をした。そして、またはっとする。

これじゃあ、寂しい気持ちを紛らわしてもらってるみたいじゃない！！

尾山は私の気持ちをまた察したのか、顔をへらっとさせた。

・・・ムカツクっ！

私は、無傷な反利き手でこぶ時をぐっと握り締めた。が・・・

「ねえねえ、葉山さん。俺のこと、信じる？」

あまりにも唐突な言葉に力が抜ける。

信じる？オレノコト、シンジル？意味が分からない。

「ねえねえ、信じる？信じない？どっち？」

何だ、その究極の選択は。問題文なしですか。

「どっち？」

ズイツと顔が近づけられる。やばい。目測約30cmの至近距離。

私は10cm後退する。

「ねえ？」

相手、約20cm前進。壁が邪魔で後退も無理だ、逃げ切れない。

ずずずずず・・・

「し、信じる！！！！信じますです、はい！」

鼻先10cmのところで尾山がピタリと止まった。

尾山は妙に真剣だった顔つきを崩してヘラッとした。

「そう！」

やっぱり変なやつだ。何がしたいんだ？

「じゃあ、俺、がんばってくるからvvhey」

だから、何をだ。

変態。馬鹿。阿呆。間抜け。イカレポンタン。何言ってるかさっぱり分からないぞ。

尾山は、意味不明な言葉を私にぽんぽんと放ってくる。

「それは、どういいうい・・・」

キンコーンカーンコーン・・・

「お。チャイムだ？キンコンカンコン星人のお出ましだ、フオ―
―」

最後まで、意味不明なやつだ。

「それって、つまり・・・尾山君って綾のことが好きってことじゃないの？」

うちの親はいつから爆弾発言魔に成り下がったのだろう。

私の親は、もつと純粹で、爆弾なんか持ってなくて、優しくて・・・な感じだったはず。

「やったねvvこれで両思いじゃない？めでたしめでたし。」
どの辺をとつてめでたしになるのだろう。

第一、私はあんなやつに全然ドキドキしな・・・くもないかもしれなくもないかもカ・・・って、どっちだよ。私。

・・・私にとって、やつは何なんだろう。

「フオ―」

「・・・」

私にとってやつは只の馬鹿。絶対そうに決まってる。

中編（後書き）

後、一編です。

僕の小説に・・・よかったら、最後まで付き合ってね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0212b/>

隣のトナリの尾山君

2010年10月17日05時04分発行